

サラワク州の現状 (後編)

～パームオイルと製紙原料のプランテーション開発にゆれるサラワク先住民～

2. 伐採からプランテーション造成まではシナリオ通り？

ジョクさんの話していた言葉で、10数年前来日した先住民からも何度か聞かされた言葉がある。「伐採はまだまだがプランテーションは最悪。土地を永久に奪われるので」という言葉だ。

しかし、伐採からプランテーションまではほぼ同じパターンで進められている。伐採が決まると、まず道が作られる。道ができれば車が入り、「伐採権」を持った人が先住民の土地から高く売れる樹木を伐って運び出す。先住民は土地に入る事すら許されない。無理に入ろうとすると、逮捕され裁判にかけられ有罪になる。では、自らも伐採権を得ようと支援者のサポートのもと申請書を提出しても返事すらもらえないか、あれやこれや言いがかりをつけられ却下される。有用樹木の伐採（択伐）後、もしそのまま何十年も放置されれば熱帯林は自然に再生するかもしれないが、伐採木を運び出した後の道を通して新たな入植者がやってくる。そして、大規模な焼畑農業を行うのが常だ。先住民の焼畑はいつも同じ土地だけを焼く。つまり二次林だけを焼くが、入植者は原生林でもかまわず焼く⁷。やがてそこに州政府から造成許可を得た企業がプランテーションを造る。これで「住民の焼き畑により破壊された荒地地をプランテーションに転換した」として開発が正当化されるのだ。

先住民は通常、数カ所の決まった土地を順番に畑として使う。畑として数年間使った後、土地を休ませるため以前使っていた土地へ移動し焼いて畑にする。休ませていた土地が二次林として再生すると、またそこに戻り焼いて使うのだ。熱帯では理にかなった持続可能な農法だが、近年は休閑地を次々と「開発」のために取り上げられる。おかげで畑として使う期間が長くなったり狭くなったりしているので、畑をあきらめて都会へ行きスラムで暮らす先住民が増えている。売春婦になる先住民女性も少なくないという（イブリン・ホン 1989）。

また mongabay.com (2010.4.15) によると、JOANGOHutan (先住民と非政府団体とのマレーシアネットワーク) のレポートによれば、土地紛争をめぐる訴訟 140 件が、サラワク裁判所でたな晒しにされており、先住民グループは自分たちの部族の土地を守るために、伐採業者やアブラヤシ農園開発者、製紙産業たちと戦っているとのこと。「地元当局、警察や伐採業者らは、法を確実に執行することよりも、共謀して先住民族コミュニティを威嚇したり攻撃したりする場合の方が多い」と書かれているようだ。また、伐採に反対する先住民リーダーの殺害や伐採業者による性的虐待なども報告されている⁸。

3. DVD「ドキュメンタリー 森の慟哭」を見て

ジョクさんを囲む大阪の集会で中井氏が制作したサラワクの DVD を見た。若い頃ブナン人の村に滞在した経験もある中井氏は、ブナン人が熱帯雨林の開発に反対し道路封鎖をしているというニュースを耳にして、サラワクへ行き撮影したそうだ。DVD でみるサラワクの状況は、バイオ燃料ブームでパーム油消費量が増加したためか、事態は以前より深刻化していた。10 年前と比べると、持続可能なパーム油のための円卓会議 (RSPO) によるパーム油認証制度ができたり、パーム油を使わない企業⁹ が少しは増えたりしたことで、多少は改善された面もあるのではと思っていたが、甘い期待だったようだ。私たちが安い外材を買い、パーム油入りの食品や洗剤などを選んでいることで、マレーシアのサラワク先住民の暮らす森の木が伐られ、伐採跡地にはアブラヤシプランテーションが作られる。その上、製紙原料のためのアカシアプランテーションまでもが作られている。プランテーションで使用された農薬による水汚染などの被害もあるそうだ。

この DVD を見ることで、私たちの生活が先住民の命と深く関わっていることに気付かされる。「私は聞きたい。私がもしあなたたちの街に行って銀行を破壊したら、何が起こるでしょう？それは私たちの現状と同じです。ここは私たちが食料を得る土地であり、私たちの銀行です。この森が私たちの銀行なのです」「この木材はヨーロッパ諸国には売れないと聞いています。持続可能ではないからです。現在私たちが心配しているのは、日本や中国、韓国がまだ違法伐採された木材を受け入れていることです」……DVD の中の先住民の言葉が胸に刺さる。

林野庁統計「2009 年木材輸入実績」によると、マレーシアからの木材輸入額は 958 億円。つまり、約 20%の木材自給率しかない日本の木材輸入量の約 8 分の 1 がマレーシア材だということだ。このうち半分以上はサラワク産であるだろうから、サラワク州の森林面積 924 万 ha のうち人工林が 6 万 ha (主にアカシアマンギウム) しかないことを考えると、日本が輸入しているマレーシア木材のほとんどは人工林からのものではなく熱帯林を伐採したものだろうと思われる。

熱帯林開発の恩恵は、常に途上国の政治家や一部の資本家にあり、先進国 (中国を含む輸入国の企業や一般消費者) にある。受益者の都合の良い様に新しい法律が作られ、先住民の土地の使用権はいとも簡単に奪われる。そこで安く「合法的」に採取された資源が先進国の暮らしをますます豊かにする。先住民による道路封鎖や不公平な裁判のニュースは、先進国で大きく報道されることはほとんどないため、我々は心安らかにその恩恵を享受できる。この責任は一体誰にあるのだろうか。

4. サラワクの今後

「フェアウッド・メールマガジン (第 77 号 2010.12.28)」(フェアウッド・パートナーズ)によると、サラワク州政府は今後 10 年以内に 100 万 ha の土地をパーム油プランテーションに転換すると発表したとのこと。現在、この土地の多くは二次熱帯林で覆われているが、泥炭沼沢林などの未踏の一次熱帯林も含まれるそうだ。これが実

現するならば、サラワクのパーム油プランテーション面積は、2020年までに現在の92万haから2倍となる200万haに拡大するという。また、日本製紙連合会の報告書(2008年)によると、1997年にサラワク州森林法が改正、新植林が承認され、長期的な木材資源供給のため2020年までに100万haの目標が立てられたとのこと。この目標に合わせて既に40件、260万haの植林ライセンスが発行されているそうだ。サラワク政府がパーム油のため、あるいは木材資源供給のために用意しているといっているこの100万haの土地は、同じ土地のことだろう。熱帯林が2020年までに100万ha失われることはほぼ確実のようだ。

国際生物多様性年といわれた2010年が終わり、せっかく盛り上がった生態系への人々の関心も薄れつつある。2002年にオランダのハーグで行われたCOP6で採択された「2010年までに生物多様性の損失速度を顕著に減少させる」という2010年目標は、地球規模生物多様性概況第三版(GB0-3)で「遺伝子、種、生態系という生物多様性を構成するすべての要素で損失が継続している」と評価された。そして、「もし、地球のシステムがある転換点(*tipping point*)を超えてしまうと、生物多様性の劇的な損失とそれに伴う広範な生態系サービスの劣化が生じるリスクが高まる。貧困層が最初にかつ最も深刻に生態系サービスの損失による影響をうけるが、最終的には全ての社会が影響を被ることになる」と警告されている。温暖化を最も重要な環境問題だと位置づけ「低炭素社会」という言葉が叫ばれているが、真の問題はCO2ではなく、私たちの消費行動そのものである。熱帯林破壊により先住民が現在受けている困難や苦痛は、やがて私たちにも還ってくるだろう。

おわりに

イギリスでは、奴隷解放運動で女性達が「砂糖をグラム食べると奴隷の命が年縮まる」という運動が行われたことが最近の研究でわかったそうだ。それをまねて、「植物油¹⁰表示のマーガリンやクッキーを食べると、先住民の命が年縮まる」というキャンペーンを行い、先進国の人々の良心に訴えかけたならば、「地球に優しい植物油」、あるいは「二酸化炭素を出さないバイオ燃料」としての今のようなパームオイルブームを少しは止められるだろうか。また、もしサラワクのチップが日本にも入って来るようになれば、「先住民の命と引き換えに作られた紙」とキャンペーンをすることは有効だろうかと考えている。

サラワク以外でも世界各地の先住民地域では木材やウラン、石油、鉄鉱石、ボーキサイトなどを巡り似たような争いが起きている。キャメロン監督のアバターは決して絵空事ではない。いずれも、先進国の限りない消費への欲望が背景にある。先住民や野生生物の命を脅かし、私たちの生活のリスクを高める熱帯林破壊に関与したくなければ、節度ある消費を心がける必要があるだろう。例えば、パーム油の入ったものをできるだけ買わないこと、紙製品を買う際は再生紙を選ぶこと、紙をごみにせず古紙回収に協力することなどは最も簡単なリスク回避の方法だ。(栗岡)

<注>

7. 入植者の焼畑と先住民の焼畑を同列に扱い、焼畑を森林破壊の元凶の如く非難することが多いが、明らかな相違がある。先住民の焼畑は森林破壊にはならない。
8. MONGABAY.com(2010.4.15) 訳「レアリゼ」(2010.7.28)
9. キャドバリーがチョコレート原料にパームオイルを使用しないことを決定、またラッシュが石鹸素地にパーム油を使用しない「PALM FREE はじめの一歩」キャンペーンを展開するなど。
10. 「植物油」と表示されている場合はパームオイルが使われていることが多い。他の植物油は、大豆油、米油、なたね油など表示される。

<参考文献・参考資料>

- ・ イブリン・ホン。北井一、原後雄太訳『サラワクの先住民』法政大学出版局、1989年
- ・ 拓務省拓務局『サラワック王国事情（海外拓殖事業調査資料第三十七輯）』1938年
- ・ 中井信介制作・監督。DVD「ドキュメンタリー 森の慟哭」FoE Japan、2010年。
- ・ 日本製紙連合会「平成19年度産業植林適地発掘等に関する調査事業 マレーシア国サラワク州におけるパルプ用材植林適地調査報告書」2008年（2011年1月閲覧）
http://www.jopp.or.jp/research_project/pdf/sarawak2007.pdf
- ・ ブルーノ・マンサー、他。サラワク・キャンペーン委員会訳『熱帯雨林のサラワク先住民』明石書店、1993年
- ・ MONGABAY.com http://news.mongabay.com/2010/0415-hance_sarawak.html (2011年1月閲覧)
- ・ 山本博之『脱植民地化とナショナリズム 英領北ボルネオにおける民俗形成-』東京大学出版会、2006年
- ・ レアリゼ2010.7.28（2011年1月閲覧）
<http://www.realiser.org/report/lifestyle/article/index.php?id=269>